5．学生スタッフのボランティア企画・広報企画

ボランティア・NPO 活動センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にもつながる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生達に向けては、地域とつながる活動のきっかけとなるような体験企画を学生スタッフが中心となって提供しています。学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。

また、学内においてもボランティアや社会課題を広く学生に知ってもらうための広報や啓発活動も学生スタッフが主体となって取り組んでいます。

2022年度の前半は、新型コロナウイルス感染症の影響が残り、地域でのイベントなどは活動の制限が続いていましたが、後半に向けて行動制限も徐々に緩和されるようになり、龍谷祭も対面で実施されるなど学内のイベントも可能となりました。また、地域のイベントも再開されるようになってきました。

このような状況において、コロナ禍で入学してきた学生スタッフは、自分たちなりに何ができるか試行錯誤しながら、動画作成や SNS を利用した情報発信や企画運営に努めました。

事　業　名	ウクライナへの募金企画
活動日程	2022年５月23日（月）、25日（水）、27日（金）、31日（火）、６月２日（木） いずれも12時45分～13時15分
活動場所	深草・瀬田・大宮キャンパス
参加人数	計64名（学生スタッフ31名、龍大生33名）
企画メンバー（学生スタッフ）	NGUYEN NGOC THUC（文学3）　大原健太郎（経営3） 謝　雲龍（政策3）　中山美代子（農学3）　馬越友梨（文学2）　太田雄斗（文学2） 神月麻伽（文学2）　松嶌和奏（文学2）　山下陽菜乃（文学2） 榎　海斗（法学2）　影裡天音（経営2）

1．経緯・目的

ウクライナの深刻な状況に鑑みて、人道支援をすることを目的として本企画を行った。

現在ウクライナでは、ロシア軍による侵攻が続いている。それにより何百万もの人がウクライナ国内外に避難を強いられる事態となった。避難を余儀なくされた人々には十分な支援が必要である。そのため支援の一環として募金活動に取り組む。

この企画に参加することにより、本学の学生や教職員がウクライナの人道危機に対して関心を持ち、具体的に行動を起こす機会としたい。さらに、ウクライナ情勢にとどまらず、深刻な国際問題を考えるきっかけになればと考えている。

2．概要

（1）活動スケジュール

４月８日（金）	企画メンバーの募集開始
４月22日（金）	第１回定例ミーティング（以降毎週金曜に開催） 募金先、ボランティアの募集や広報、 募金箱の準備、集計方法などの検討を開始
５月９日（月）	広報開始
５月23日（月）～６月２日（木）	３キャンパスで昼休み（12時45分～13時15分）募金活動
６月３日（木）	最終回定例ミーティング（ふりかえり等）
６月15日（水）	贈呈式、口座への入金

（2）募金活動について

・５月23日（月）～６月２日（木）の間の計５回、昼休みに学内で募金活動を行った。募金活動の際は１組２人以上のグループになって募金箱

を管理し、活動後は毎回、キャンパスごとで募金額の集計を行った。
※大宮キャンパスのみ週に１回の集計
・深草、瀬田の学生スタッフが協力し、企画・運営した。

（3）ボランティア
学生スタッフだけで募金活動を行うのではなく、チラシやSNSを通じて、全学に向けて一緒に募金活動をするメンバーを募った。
※ Google フォームを利用して受付

（4）募金先
龍谷大学が行っている「ウクライナへの人道支援募金」

（5）募金額
200,676円（最終合計額）

（6）贈呈式
６月15日（水）に『ウクライナへの人道支援募金』に全額を寄付するため、入澤学長に受け取っていただいた。

3. 参加者の声・得られた効果など

ボランティア参加した学生に対し、活動後にアンケートを実施した（回答総数は46件）。「国際問題に対して興味関心が強まったと思いますか？」という質問に対しては、約90%が「ややそう思う」「そう思う」と回答しており、ウクライナへの人道支援のみならず、国際問題を考えるきっかけにもなったのではないかと考える。

また、自由記述では、以下のような声があった。
・「いつもは部活動をしていて、ボランティアなどに参加することが出来ませんが、昼休みにできるボランティアだったので、参加して良かったなと思いました」（社会学部１年）
・「人々に平和を呼び掛けることはとても大切なことだと学んだ」（文学部３年・学生スタッフ）
・「楽しかったし、皆が国際問題を考える良いきっかけになったと思います。とても意味のある企画だったと思います。参加できて良かったです。」（企画メンバー）

4. 学んだこと・今後の課題

・仕事量の偏りが見られたので、今後は役割分担を細分化することが必要だと思った。
・ミーティングで話し合う時間が、もっと必要だった。
・募金活動では、立っているだけではなく声をかけることが大切だと学んだ。
・もう少し早く企画を立ち上げ、企画メンバーを募集した方が良かった。

この活動は、ウクライナで起きている戦争や人道危機に対し、自分たちにも出来ることは何かという模索から始まった。ウクライナの人の話や、過去の学生スタッフの活動報告書などを参考に、募金活動を行うことにした。

深草の学生スタッフから始まったこの企画は、その思いが届き、瀬田の学生スタッフも企画メンバーとして参加し、両キャンパス合同企画へと成長した。瀬田の学生スタッフが参加してくれたからこそ、３キャンパスでの開催が実現できた。また、数多くの教職員のみなさんや多数の部署、団体にご支援、ご協力をしていただいたことも大きな力となった。

〈報告者　太田 雄斗〉

事　業　名	『身近なところからSDGs』ワークショップ（瀬田）
活動日時	2022年６月６日（月）16時55分～18時25分
活動場所	瀬田キャンパス　６号館プレゼンテーション室
参加人数	17名（うち、学生スタッフ15名）
企画メンバー（学生スタッフ）	鳴海彩紀（農学3）　片岡克望（社会3）　谷垣美幸（農学3）　堀井涼花（農学3）　川口克基（社会2）

1. 経緯・目的

昨今、大学のポータルやテレビ、新聞で頻繁に取り上げられ、また企業活動の指標となっていることも多い「SDGs」。目標として掲げられている貧困や環境問題は規模が大きく、私たち一般人には関係ないことのように思えますが、レジ袋の有料化や5Gなど私たちの日常生活にも深く関わっています。

SDGsについて考える企画で、大学の講演会など大人主催の案内はたくさん目にしますが、私自身が大人達の声が胸に響いてきた経験があまりありません。しかし、同じ世代の人たちがSDGsの取り組みをしているのを見ると、「自分もできることがあるのではないか。SDGs目標達成のために、若い人がアクションを起こしてもらえるようなことをやってみたい。」と思うようになりました。大学生にSDGsについて考えてもらうならば、同じ学生である私たちが働きかけた方が興味を持ってもらえるのではないかと考えました。

「SDGs」という単語は知っていても、詳しい内容や実際に私たちにできる行動を知らない人が多いのではないかと考え、本企画では、これらを学ぶと同時にSDGsについて考える機会を提供することと、ボランティアの一歩を踏み出してもらえるような機会にすることが目的です。カードゲームを使用することで、SDGsの堅苦しさを抑え、楽しく学ぶことができると考えます。

2. 概要

【プログラムの流れ】

1）開催経緯やワークショップの流れ等を説明
2）SDGsとはどのような取り組みなのか
3）「THE SDGsアクションカードゲームX」*を使って課題解決のアイデアを出し合うワークショップ

＊「トレードオフカード」に記載されているSDGsに関連した社会問題に対して、リソースカードに書いている「アイテム」を用いて解決案を提示するゲーム。他の人が出したアイデアに付随して自分のアイデアを考えても良い。

4）ゲーム終了後、班で話し合ったアイデアの一つをみんなで共有
5）企画メンバーで考えてきた私たちにできることと、関連するボランティア先を紹介
6）一人一つ、やります宣言を用紙に記入

3. 参加者の声・得られた効果など

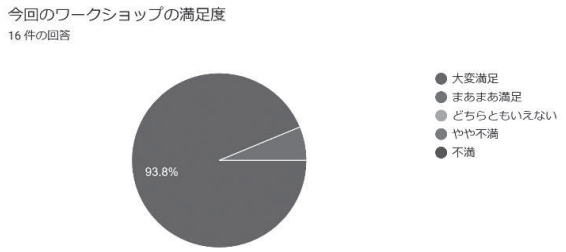
【課題解決アイデア】

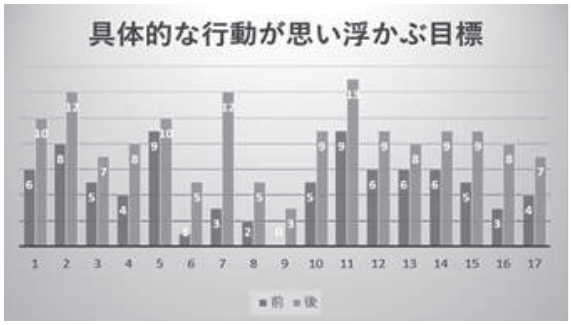
●…トレードオフカードの内容（SDGs目標番号）
○…「リソースカード」を用いたアイデア

●自殺の相談にのったら鬱になりそうになった（目標３）
○自殺願望を乗り越えた「有名人」の話を聞く
●遺産の保護を意識しすぎて観光客が減少した（目標11）
○きれいな景観が見られる「温泉」施設の開業やフェスなどのイベントを開催して人を集める
●ｅラーニングを推奨したら引きこもりが増加した（目標４）
○パソコン画面に魅力的なツアープラン、「アニメ」を表示することによって外への興味を引きつける
●農家の野菜が売れない（目標２）
○商品購入の特典として「ダンス」を踊るなど付加価値をつける

【参加者アンケート】

すべての参加者から体験会に満足してもらうことができた他、全17の目標で「具体的な行動が思い浮かぶ」と答えた人がワークショップ前より増えました。また、参加者個別でも具体的な行動が思い浮かぶ目標が平均3.6個増えました。





【参加者の感想】

・カードゲームで楽しく、小さいアイデアでも問題解決に少しでも繋げることができることを感じられました。

・SDGs を身近に感じることができて、これから生活するときに少しでも思い出せたらいいと思った。

4. 学んだこと・今後の課題

・定期的にミーティングを行っていましたが全員がそろうことがなく、参加できない人へのフォローが課題でした。事前に議題内容を共有しておき、参加できない人から先に意見をもらっておいたり、話し合いの結果と過程を共有してわからないところがないか尋ねておくなどミーティングに参加していた人と同程度の理解が得られるような工夫が必要でした。

・できうる広報手段は行ったにもかかわらず龍大生の参加率が悪かったので、友人を連れてくるといった地道だが確実な方法をとればよかったと考えています。

・チラシを作成する際、エコを意識して裏紙を再利用しました。今後も、既存の物を活用できないかを考えることが必要だと感じました。

〈報告者：鳴海 彩紀〉

事　業　名	第100回龍谷祭における展示・模擬店の出店（瀬田）
活動日程	2022年10月29日（土）・10月30日（日） 【展　示】10時00分～17時00分 【模擬店】10時30分～16時00分
活動場所	【展　示】２号館多機能教室１，２　【模擬店】噴水前
来場者数	【展　示】151名（アンケート回答者数）【模擬店】313食（販売）
企画メンバー（学生スタッフ）	【展　示】 松村優輝（農学3）　中村あや（社会2）　丸山汰一（農学2）　小橋美沙（社会1） 宇野姫愛（社会1）　金田弥栞（社会1） 【模擬店】 成川雅妃（社会2）　池本結希菜（社会2）　松村春華（社会2） 三枝亜伽莉（農学2）　関　鉄仁（農学2）　東郷真穂（農学2）

1. 経緯・目的

龍谷祭は2020年が全面中止となり、瀬田では2021年にオンラインでの開催となった。このたび３年ぶりに対面で開催されることになったことから、展示と模擬店を通してボランティアや社会課題、ボランティア・NPO 活動センター（以下センター）について、来場者に知ってもらう機会にする。

学内関係者だけではなく学外からも人が訪れるため、人目につくような展示物を作成する他、ただ観るだけではなく実際に体験して啓発できるような来場者参加型のコーナーも設けたい。

また、模擬店では、フェアトレード商品を用いたチュロスを出店することで、フェアトレードや

SDGs を身近に感じてもらうと同時に、日常生活の中で目標達成の手助けができることを知ってもらい、認知度を高めることを目指す。

2. 概要

（1）展示

テーマ：SDGs に触れる・学ぶボラセン展示～ボラセンって一体何者！？～

内容：

①ボランティア・NPO 活動センターの紹介

・センター事業の紹介

・本やリユース傘の貸し出し

・SNS 紹介

②体験学習プログラム

・国内体験学習プログラム（福島／近江八幡）

・海外体験学習プログラム（JICA）

③東日本大震災復興支援ボランティア

④学生スタッフ企画

・大津祭

・ウクライナ募金

⑤写真展示

学生スタッフの普段の活動の様子を知ってもらう

⑥夏ボラ

夏休みにグループや個人で参加したボランティア活動を紹介

⑦ボランティアマップ

ボランティア団体や活動場所を自由に地図上に書き込めるようにした

⑧ SDGs

SDGs とは何か、私たちにできることをボランティア活動目線から紹介

⑨体験コーナー

・SDGs カードゲーム

・ボッチャ（パラスポーツ）

（2）模擬店

内　容：フェアトレードチュロス

価　格：３本入りで 300円

個　数：２日間で 313個

売上金：103,450円

収　益：55,611円

利益の使途：

①来年度の模擬店の経費

②学生スタッフ交流費用（合宿や新歓等）

3. 参加者の声・得られた効果など

（1）展示

ボッチャが楽しかったという声や東日本震災復興支援ボランティアの展示が印象に残ったという回答が数多くあり、幅広い活動をしていることに興味を持ってくれた人が多かった。龍大生の感想からセンターを知らなかったという声も時折見られ、この機会を通して存在を知ってもらえた。その他の感想は以下の通り。

・一部の方だけでなく多くの人が助け合い、自分にできることをしていくような事が大切だと感じました。（地域住民）

・ボランティアは忙しくて行けてなかったが意欲をもって行こうという気になった。（本学学生）

・ボランティアは高尚なものだと思っていたがとても身近なものだと分かりました。（本学学生）

・フェアトレード商品の購入を意識します。（回答者不明）

（2）模擬店

・想像以上に来場者があり、準備が追い付かず待ち時間が長くなってしまったが、笑顔でチュロスを買ってくれて嬉しかった。

・チラシ配りや待ち時間の中で、フェアトレードについて説明するなど、来場者との交流を行った。また、想定を上回る個数を販売できた。これらのことから、SDGs の認知度を高めることができたと思う。

4. 学んだこと・今後の課題

（1）展示

・来場者のボランティアイメージやアンケートの感想から、ボランティアに対して好ましい印象をもっていることが分かり、自分たちの活動にやりがいを感じることができたので、これからの意欲向上に繋がった。

・ボッチャ体験が盛り上がりを見せて子どもでも楽しく遊んでいた。

・直前に制作で忙しくなったので準備期間に余裕をもたせるべきだった。しかし、意欲的に協力してくれる学生スタッフの姿が見られ良かった。

・学生スタッフ全員が作品全てを理解して説明できるようにするのは難しく、今回は内容をまとめた紙だけしか作れなかったので、スタッフ同士の説明会を実施すべきだった。また準備の段階で偏りがないようにそれぞれ必ず一つは説明できるようにスタッフ振り分けるべきという意見もでた。

・メインテーマのSDGsが他と比べて若干目立っていなかった。取り上げるテーマが広いと説明を求められた時にスタッフ全員が回答できるのかという懸念点もあったので、テーマを一つに絞るのか複数にするのかをはっきり決めるべきだと感じた。

・今回来場者数を正確に計測していなかったため、今後は計測アプリや機械を使用するなどでしっかり数える必要がある。

（2）模擬店

・事前の機材確認や共有されているものに対して学生スタッフ内での情報確認不足があり、フライヤーが使えない事に当日気付いた。また、それによって調理時間に遅れが生じ、チュロスを手渡すまでの待ち時間が長かった。

・ガスボンベが一個しか使えないので、なるべく一つの機材で調理できるメニューを考えるべきだった。

・コロナの影響もあって多くの制約がある龍祭実行委員会からの細かなルールを、学生スタッフ全体で共有しておくべきだった。

・龍祭当日までに調理手順を調理担当の人に動画で共有したので、本番で調理が上手くいった。

〈報告者：中村 あや（展示）、成川 雅妃（模擬店）〉

事　業　名	第100回龍谷祭における展示・模擬店の出店（深草）
活動日程	2022年11月４日（金）～11月６日（日）
活動場所	深草キャンパス22号館205教室（展示）、図書館横芝生エリア５号館前（模擬店）
来場者人数	展示：約400名／模擬店：550食
企画メンバー（学生スタッフ）	【展示】 三野涼介（経済3）　大原健太郎（経営3）　山下陽菜乃（文学2） 田渕勝士（法学1）　鬻田優斗（法学1）　西林勇貴（政策1）　内田美羽（国際1） 【模擬店】 井関萌乃（文学3）　神月麻伽（文学2）　馬塲康世（文学2）　掛川大輔（経済2） 加藤秀大（経済2）　渡邊湖都子（経営2）　榎　海斗（法学2）

1. 経緯・目的

2020・2021年度はコロナの影響で龍谷祭がオンラインでの実施であった。ボランティア・NPO活動センター（以下センター）は、龍谷祭でボランティアに関する展示と模擬店に取り組んだ。

今年度３年ぶりの対面での実施となり、以下の目的で龍谷祭における展示と模擬店の出店に取り組んだ。

【展示】

災害に関する展示を出展し、龍谷祭に参加する方々へ災害について関心をもってもらう。また展示の出展を通して、センターの認知度向上に繋げる。

【模擬店】

模擬店を出店することにより、龍谷祭に参加する人々にセンターの名前を認知してもらい、センターの認知度向上につなげる。

2. 概要

■展示

『ボラ拾遺物語（災害編）～命を守るストーリー～』

展示タイトルにあるように、今回の展示は「入り口から出口までを１つのストーリーに」というコンセプトのもと制作を進めた。展示内容として、ある家族を登場人物とした物語から始まり、避難グッズやハザードマップ、福祉避難所、液状化現象、女性の防災や断水、センター主催の事業などを紹介する展示を行った。そして出口付近にアンケートブースやボランティア相談ブースを設置し、より多くの来場者にアンケートに答えてもらえるよう、またボランティアに興味を持った方にボランティアを紹介できるようにした。

■模擬店『ボラセン特製チーズホットク』

内　容　チーズホットク（蜂蜜トッピング）
価　格　１個250円、（チケット）１個200円
販売数　555個
売上高　137,750円
利　益　46,190円
使　途　①30,000円を学生スタッフ運営費
　　②16,190円をウクライナ募金へ寄付

【ウクライナ募金】

以前、学生スタッフの企画としてウクライナへの募金活動に取り組んだ。その活動を通じて得た学びは大きく、今後もこういった活動を継続していくことが大切だと感じていた。そこで今回、模擬店の収益の一部を龍谷大学のウクライナ人道支援募金に寄付（16,190円）することとし、12月19日（月）に入澤学長に受け取っていただいた。今後も継続してウクライナ以外にも世界の問題について理解を深め、今後も色んな活動に挑戦していきたい。

3. 参加者の声・得られた効果など

■展示来場者の声

アンケート項目と結果は以下の通りである。

※今回の龍谷祭ではその場ですぐに記入してもらうため、紙でアンケートを実施した。

(1) 展示内容はどうでしたか？
- 良かった：272名／285名
- まあまあ：13名／285名
- 良くなかった：0名／285名

(2) 防災の理解は深まりましたか？
- 深まった：261名／285名
- まあまあ：24名／285名
- 深まらなかった：0名／285名

(3) 感想
- 液状化体験ブースが楽しかった。
- 災害が起きたときにすべきだと思っていたことが間違っており、しっかり学んで災害に備えようと思った。
- 他ボランティアにも参加して知識を深めたいと思った。　等

■模擬店購入者の声

Twitter で検索した結果、商品の写真とともに『特に美味しかったからおすすめ』と投稿があった。そのような投稿があったことにより、センターの認知度向上に繋がったと考えられる。

4. 学んだこと・今後の課題

■展示

・展示物をストーリー構成にした。
　→来場者の方々に災害について、自分事として考えてもらえるようにするため。

・液状化体験ブースを設置した。
　→文章ではイメージしづらい液状化現象を分かりやすく伝えることができた。

・展示内容の作成を企画メンバーだけで行うのではなく、他の学生スタッフとともに行った。
→「災害」という大きなテーマとコンセプトを企画メンバーで決め、このテーマに基づき、学生スタッフそれぞれの多様な視点から展示物を作成した。このことにより各自が様々な災害についての学びを深めることができた。
・スケジュール管理の工夫
→スケジュールを明確にし、何度もリマインドを行うことで、期日内に展示物を完成させることができた。
・事前学習として外部機関に行き知識を深めた。
→災害についての展示物を作成する前に、コアで兵庫県の「人とみらい防災センター」という実際の展示施設を訪れたことにより、来場者への伝え方などを学ぶことができた。
・展示会場について、22号館の２階であったため、アピールが難しかった。龍谷祭実行委員へ会場の案を提出するまでにはどんな会場であるか把握し、１階を希望するべきだった。

■模擬店
・責任者、副責任者の負担が大きかったため、逐一コアで共有し、仕事は分配する。
・スタッフミーティングで報告し､情報を共有して、みんなで話し合い、意見を出してもらう。
・模擬店は提出物が多く、期限もきっちり決まっているためしっかり実行委員会からの資料は印刷の上、読み込む。
・シフトづくりは早めに行う。
・売上の使途をもう少し周知できたら良かった。
・仕入量を入念に検討し、ある程度の量を仕入れておく。

〈報告者:山下 陽菜乃（展示）、神月 麻伽（模擬店）〉

事　業　名	大津祭　ボランティア協力（瀬田）
活動日程	①2022年８月７日（日）14時00分～16時00分 ②2022年９月16日（金）10時30分～12時30分 ③2022年９月23日（金）14時00分～16時00分 ④2022年10月２日（日）10時30分～12時00分 ⑤2022年10月９日（日）7時30分～18時30分
活動場所	①大津祭曳山展示館 ②瀬田キャンパス　学生交流会館カンファレンスルーム ③大津中央市民センター ④大津中央市民センター ⑤大津市内中央街
参加人数	①13名（うち学生スタッフ６名） ②35名（うち学生スタッフ16名） ③15名（うち学生スタッフ11名） ④26名（うち学生スタッフ14名） ⑤40名（うち学生スタッフ18名）
企画メンバー (学生スタッフ)	高橋慶多（社会3）　池本結希菜（社会2）　川口克基（社会2） 成川雅妃（社会2）　丸山汰一（農学2）　倉田若奈（社会1） 蔵本千優（社会1）　関塚美帆（社会1）　土屋朝揮（農学1）

1. 経緯・目的

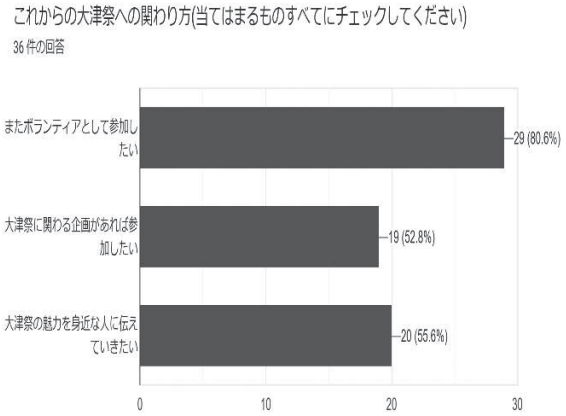
・新型コロナウイルス感染症の影響で、２年間大津祭の曳山行事が開催されなかった。そういった状況の中、大津祭曳山連盟の方からは、大津祭への関心の低下や伝統文化の継承がより困難になるのではないかというお話をうかがった。そこで、龍大生が大津祭に参加して祭りを盛り上げると共に、私達若者も伝統文化継承の当事者になれるという意識を持ち、伝統文化継承の重要性についての理解を深める。
・国指定の重要無形民俗文化財と、歴史ある大津祭にボランティア参加することで、龍大生に大津の伝統文化について知ってもらう。

2. 概要

①事前勉強会
日時：８月７日（日）14時00分～16時00分
場所：大津祭曳山展示館
内容：曳山展示館の見学と事前勉強会に行ったコアメンバーが参加学生に説明する。また、展示館の方からお話を聞き、大津祭について学ぶ。
②参加者交流会
日時：９月16日（金）10時30分～12時30分
場所：瀬田キャンパス学生交流会館カンファレンスルーム
内容：ボランティア参加予定者同士の交流、勉強会で学んだことを共有し、大津祭について知ってもらう。
③事前説明会（曳き手）
日時：９月23日（金）14時00分～16時00分
場所：大津中央市民センター
内容：曳手ボランティアの説明会への参加
④事前説明会（一般ボランティア）
日時：10月２日（日）10時30分～12時00分
場所：大津中央市民センター
内容：一般ボランティアの説明会への参加
⑤大津祭当日
日時：2022年10月９日（日）7時30分～18時30分
場所：大津市内中央街
内容：大津祭のボランティア
活動内容：曳山の曳き手、巡行路の警備など

3. 参加者の声・得られた効果など

〇交流会
・大津祭は地元の祭りなので毎年参加していたが、大津祭に関する知識は無かったと実感させられた。
・クイズで大津祭のことがわかり、参加者とも交流ができたのでよかった。
・曳山に20人以上の人が乗るとは思わなかった。クイズがとても楽しくできた。
〇本祭
(1) 曳き手
・お囃子やからくり人形を間近で見ることができたことや、この祭りに携わっている人たちや地元の人の思いに触れることが出来てとても良い経験をすることが出来た。
・自分が担当した場所だけでなく、他の山のお囃子を聞くことができてよかった。また、最後の方はお囃子を演奏されてる方と一体感を持って山を曳くことができたのですごく楽しかった。
(2) 一般ボランティア
・１番良い場所で迫力のある曳き山を見られたことが楽しかった。手を振ったら笑顔で振り返してくれたり、ちまきを貰えたりと地域の方の優しさに支えられた。
・ほかのボランティアさんと挨拶したり、言葉を交わしたりできて、温かい気持ちになった。一生懸命動く大津祭関係者の方たちを見て、無事に開催できたのもこの方たちのおかげだし、祭りを守り続けたいという真心が伝わった。
(3) 今後の関わり方について



上記の参加学生の声から、ボランティアとして大津祭に参加することで祭りを盛り上げ、大津祭を担う当事者になれたと感じてもらえたのではないかと考える。また、参加学生が大津の伝統文化である大津祭について知ってもらうと共に、伝統文化継承の重要性について理解を深めてもらえたのではないかと考える。

4. 学んだこと・今後の課題

・勉強会で曳山展示館の方と連絡の齟齬があった。メールでの連絡のみだったので、今後は前日に電話で連絡を取るなどこまめな連絡をしていきた

い。
・全員参加としていた交流会に参加できていない人への対応が遅れてしまった。今後は交流会に来れない人の対応を事前に細かく決めておくようにしたい
・学生へのメールでの連絡を複数のコアメンバーが行ってしまい、連絡が交錯してしまった。今後はメールでの連絡は１人に絞って、誰か代表がやりとりをするようにしたい。

〈報告者：丸山 汰一〉

事　業　名	多世代交流みんなほほえみ計画（瀬田）
活動日時	2023年３月25日（土）11時00分～16時30分 （イベントは13時00分～16時00分）
活動場所	守山市大型児童センター（ほほえみセンター）
参加人数	18名（うち、学生スタッフ14名）
企画メンバー (学生スタッフ)	三枝亜伽莉（農学2）　成川雅妃（社会2）　松村春華（社会2）　幸山悠大（社会2） 丸山汰一（農学2）　関　鉄仁（農学2）　土屋朝揮（農学1）　萩原千絵（社会1） 蔵本千優（社会1）

1. 経緯・目的

守山市の児童館ほほえみセンターから、20周年事業に参加してほしいとの依頼があった。以前、龍大生が授業の一環で関わっていた時に子供たちがとても喜んでいたというお話を伺い、事業の目的である「児童館ならではの異年齢が集まって遊べる場で、子供から大人までが年齢に関係なく“あそび”を楽しみながら20年の感謝の気持ちを伝える」ということに共感した。

また、学生スタッフ活動でもコロナ禍でサークルとのつながりが作れておらず、今後の関係構築のために、学内のボランティア系サークル等も巻き込みたいと考えた。これらのことから、以下を目的にこの企画を実施した。

①本学学生がほほえみセンターの事業に協力し、イベントを盛り上げる。
②このボランティアに参加した学生が多世代の人と同じ遊びを共有し、コミュニケーションを図ることでお互いのことを知り、理解する。
③学内のボランティア系サークル等に企画協力を呼び掛けることで、今後の情報交換や情報共有など、連携を図るきっかけとする。

2. 概要

以下のブース運営や手伝いをした。

①龍谷大学遊びコーナー運営
・ボッチャ
・手裏剣ストラックアウト
②下記のコーナーへのボランティア参加
・昔遊びコーナー（金森老人クラブ運営）
・アイテム集めコーナー

3. 参加者の声・得られた効果など

準備段階でほほえみセンターの職員さんと対面で打ち合わせしたことで、スタッフの皆さんとも交流でき、私たちがやりやすい環境を作ってくださった。また、制作物を余裕もって作ることができた。

当日はほほえみセンターの職員さんから子供の接し方を学びながら小学生と接することができ、手裏剣ストラックアウトとボッチャコーナーを提供して、子供たちに楽しんでもらえたと感じている。

【参加者アンケートより】
・子供に喜んで貰えるためには、どう接すればよいか考えたりする良い機会になった。

・お互いを知るところまでは難しいが、10代～80代までの世代が交流できる場というのはとても貴重で、それぞれの年代で考えていることや行動などの違いを感じることができた。
・子供たちの元気なエネルギーをもらった。

4. 学んだこと・今後の課題

【準備段階】
・サークルに声をかけたが予定が合わず、急きょ一般募集に切り替えた。最初から両方の呼びかけをすべきだったことに加え、一般募集の広報ももっと積極的にすればよかった。よって目的の③は達成できなかった。
・急にミーティングをしたり、参加者に対してのメールが直前になったりしたので、いつまでに何をするかという計画を見える化しておくべきだった。

【当日運営】
・持ち場を固定にしてしまったため、多世代交流できた学生が限られてしまったので、目的の②の達成には十分ではなかった。持ち場を交代すればよかった。

〈報告者：三枝 亜伽莉〉

事　業　名	ふかくさ輝っず児童館交流ボランティア～龍谷キッズふれあいパーク～（深草）
活動日時	2023年３月27日（月）9時00分～17時00分
活動場所	深草キャンパス　和顔館・専精館
参加人数	小学生74名　ボランティア39名（学生スタッフ24名・龍大生15名）
企画メンバー（学生スタッフ）	千葉圭喜（文学3）　馬越友梨（文学2）　馬場康世（文学2）　的場美佳（文学2） 太田早紀（経済2）　八田知紗（経済2）　影裡天音（経営2）　榎　海斗（法学2） 奥田真史（政策2）　川勝裕太（経済1）　兒嶋　愛（政策1）

1. 経緯・目的

・児童館に通う子どもたちにとって、なじみのない深草キャンパスという広い場所で大学生と思いきり遊ぶことで長期休みの思い出になることを目指して開催した。
・大学生にとって、活動場所というものがボランティア参加に対する一つのハードルになっていると感じたことから、普段通っていてなじみのある深草キャンパスで開催することで、ボランティアをしたことない学生が参加しやすいボランティアになることを目指した。

2. 概要

深草キャンパスから徒歩15分ほどの場所にある「ふかくさ輝っず児童館」に、夏休みから定期的にボランティアとして関わる中で、今回の企画に協力してもらえることとなった。

①３月20日　事前説明会（22号館302教室）
10時30分　受付開始
11時00分　当日の流れ・主旨目的
　　アイスブレイク（名札作成）
12時30分　お昼休憩
13時30分　教室班・キャンパス班流れ説明
14時30分　体育館班流れ説明
15時00分　終了・解散

②３月27日　当日
9時00分　センター集合・朝ミーティング
9時15分　大学出発
9時40分　児童館着・子どもたちと児童館出発
10時00分　正門到着・トイレ休憩
10時10分　キャンパス班＆教室班遊び開始
○キャンパス班○
小学生６～７名と大学生２名で１グループとし（計７グループ）、スタンプラリー形式でキャンパス内チェックポイントを回った。また芝生エリアで宝探しも実施した。
○教室班○
和顔館の教室（B109、B110、B201）を使用し、紙飛行機・割り箸鉄砲・万華鏡・ヨーヨーを工作して実際に遊ぶことの出来る場を用意した。
11時40分　遊び終了・お昼休憩（和顔館 B201教室）
12時40分　お昼休憩終了・体育館（専精館）移

動開始
13時00分　体育館班遊び開始
○体育館班○
体育館内でじゃんけん列車や小学生と大学生合同の６チームでドッジボールを実施した。
14時00分　遊び終了・トイレ休憩・帰宅準備・集合写真
14時30分　体育館出発
14時40分　終わりの会（正門前）
15時00分　児童館着
16時30分　ボランティア振り返り開始
17時00分　終了・解散

3. 参加者の声・得られた効果など

①ボランティア参加者の声
【印象に残ったこと】
・最初は緊張していた子どもたちが、最後には手を繋いだり、ハイタッチしてくれてうれしかった。
・トラブルになりそうなところを子どもたち同士が、声をかけあって全員で楽しめるように動いていた。
・子どもたちが常に全力だった。
【難しいと感じたこと】
・複数人を相手にしているときの対応
・学年や成長度によって出来ることに差があり、どの程度のサポートをするべきなのかがわからなかった。
②参加児童の声
・大学生のお兄さん・お姉さんたちと遊んで仲良くなれて良かった。
・また龍谷大学で遊びたい。
・将来龍谷大学に進学してボランティアしたくなった。
③得られた効果
・「子どもたちと楽しく遊べましたか？」「今回以外にもボランティア活動したいと思いますか？」という問いに対してほとんどの人が「はい」と回答していた。
・子どもたちにとっては龍谷大学や大学生というものが、大学生にとっては児童館や子どもたちというものが身近に感じられ、今後両者の関係が結びついていくきっかけとなった。

4. 学んだこと・今後の課題

○全体○
【よかった点】
・オープンチャットや事前説明会などを活用することによって、当日のスムーズな進行に役立った。
・移動やドッジボールの際に、関わる大学生と小学生を固定したことによって両者の仲が深まった。
・事前に立てたタイムスケジュール通りに動くことができ、大きな事故や怪我無く一日を終えることが出来た。
・児童館の職員さんと密に連絡を取ることができた。
【改善点】
・コアだけが知っている情報があり、うまくボランティアに参加した学生に共有出来ていない部分があった。
・普段のミーティングやリハーサルを緩い雰囲気でやってしまうことが多く、もっとメリハリをつけるべきだった。
・コアの動きを各班に任せたところ連携がうまくいかず、あまり子どもたちと関われない人が出来てしまった。
・気温が高かったので涼めるスペースを作るべきだった。
・もっと早めにタイムスケジュールを見直すべきだった。
・全体的に準備がギリギリになってしまった。
・走らないことをもっと強調するべきだった。
○体育館班○
【よかった点】
・全体にルールの共有をしたことで、各現場の判断で試合をスムーズに進めることが出来た。

・動線が明確で子どもたちの誘導がスムーズにできた。

【改善点】

・救急箱を用意していたが、氷の準備がなく突き指の対応に時間がかかってしまった。

・体育館で終わりの会をする予定だったが、時間が押してしまい出来なかった。

〇キャンパス班〇

【よかった点】

・学生スタッフと龍大生をバランスよく配置出来た。

・ほぼ全てのグループが時間通りにまわりきれた。

【改善点】

・事前に子どもたちをグループ分けしてもらいたいということが児童館の職員さんにうまく伝わっていなかった。

〇教室班〇

【よかった点】

・大教室を使うアイデアが子どもたちにとって新鮮で大学らしさを感じてもらえた。

・途中から子どもたちが自分で遊び方を考えて実行していたので、作り方と合わせて学びに繋げることが出来た。

【改善点】

・子どもたちの人数の偏りをなくす誘導が出来なかった。

・ハサミやキリが放置されている時間があった。

今回の企画を通して学んだこととして、様々な視点を持つということが挙げられます。子どもたちに

とって良いことを考えている時に、それは大学生のボランティアや児童館の職員さんにとってはどうなのかを考える必要があり、それぞれの立場にとっての最適を探すことは想像以上に難しくとても悩んだ部分でした。

また、責任者として全てを一人でやるのではなく、他の仲間に頼ることの大切さを学びました。役割分担を細分化することで生まれた余裕や仲間の視点から多くの気付きやアイデアを得ることに繋がりました。これらのことを実践していくために大切なことは、「一つの問題について思考し、その答えにたどりつく一歩手前でもう一度考え直してみる」ということだと思います。自分が考えた最適の近くにはより発展した最適や、別の最適の可能性があることを理解し、それを受け入れることを今後も大切にしていきたいと思います。

〈報告者：馬場 康世〉